

はじめに

領域横断的研究に不足があると見える現象について、すこし釈明しておきたい。

分野にもよるが、一般的に、優れた研究は領域横断的研究であることが多い。たとえば、中国の仏教を研究していても、その源となるインドの仏教についても研究したり、日本での変容までも研究している場合もある。そういう学識を背景として、中国の仏教を論じれば、より正確で深い論文になる可能性が高いが、論文の表面には、背景としているインドや日本の仏教に対する学識は表れない。したがって、これは領域横断的研究とは呼ばれない（私はこれを「一人学際^{ひとりがくさい}」と称している）。一方、一つのテーマについて、中国仏教、インド仏教、日本仏教の専門家が合同して、論文を書けば、これは領域横断的とか学際的研究と称される。しかし中国仏教なら中国仏教特有の問題点と視点があり、それらは必ずしもインド仏教や日本仏教の問題と絡まないことも多く、それはインド仏教についても日本仏教についても同じ事である。そのために、共同研究は、各分野が一つのテーマを扱っていても、相互にはほとんど連関が無く、その成果も単なる論文の集成になってしまうことも少なくない。

「古典学の再構築」でも、「一人学際」的研究が多いために、一見すると、領域横断的研究が少なく見える。私の属している B 02班を例に挙げると、B02班では、中国の禅文化と西洋キリシタン文化の受容と展開を中心テーマとしているので、中国や韓国の禅文化、中世ヨーロッパのキリシタン文化についての研究をしなければ、正確なことは書けない場合が多い。つまりもともと「一人学際」でなければ、研究を進めにくい分野なのである。

同班の丸山徹氏は最近、1536年に初めて刊行されたポルトガル語の正書法辞典の翻刻・索引を総括班から出版していただいた。この索引の出版は世界で初めての事で、ポルトガル、ブラジル、インドなど世界各地の研究者が、丸山氏の作業が終わるのを待ち望んでいたものである。そしてこの索引は、日本のキリシタン資料を扱う上での基本的な資料でもあったが、入手が難しいのと、索引が無いためにほとんど利用されてこなかった。これで、日本のキリシタン資料に関して、より正確な論述が可能になった。また、丸山氏の研究テーマとしているインドのコンカニ語の教義書（ドチリナ）も、日本のキリシタン資料研究とはまったく連関がないように見えるが、実際には、イエズス会の世界的な規模での布教の一環であり、その環の一部である日本のキリシタン資料と密接につながっているのである。布教地の言語に訳された教義書は日本、インド、フィリピンなど少数のところにしかな無く、これらは当然、比較対照されなければ、日本語訳の教義書の性格も理解できない。丸山氏の研究は典型的な「一人学際」的研究である。これをいろいろな分野の研究者が共同して研究しても、個別の研究の集成でしかなくなるであろう。一人の研究者が、それぞれの分野の専門家と討論しつつ、独自に研究を行い、一つの視点から、一人で体系化してゆくことによって、初めて、優れた領域横断的研究ができるのである。

この「古典学の再構築」のように異領域の研究者が集まることによって、様々な視点、様々な情報交換が行われ、現実には、領域横断的研究を作り上げて行っている。その成果も、世間で考える学際的研究の形にはなっていないとしても、「一人学際」であることが多い。それが本特定領域研究において、領域横断的研究成果が少ないように見える原因でもある。

そういう目で見直せば、この特定領域研究の各班の研究成果には領域横断的研究が少ないことが理解されるのではないか。

平成13年7月1日

B02班代表 木田 章義